

2023年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
教育学部 子ども発達学科	教授	辻 正人
最終学歴	学位	専門分野
愛知教育大学(社会科)	学士	

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

人間形成の大切な時期を過ごす子どもたちに、情熱と使命感をもって関わるができる教員志望の学生の育成を目指す。

【目標】

- ・自分の目指す教師像を明確にもたせ、目標達成に向けて努力させる。
- ・採用試験の全員合格を目指し、意欲を持って頑張れるよう支援する。
- ・より多くの教職を目指す学生に「指導力向上特別講座」への参加を促す。
- ・教職を目指す学生に「愛知県教員育成指標」に基づく「使命感や実践的指導力」等を身につけさせる。

【方針】

- ・自分の目指す教師像の達成のために、自分自身を振り返りさせるとともに、適切な助言や賞賛に努める。
- ・意欲をもって採用試験に臨むことができるようにするために、希望自治体の情報分析を十分行い、ポイントを絞った繰り返しの学習に重点を置いて進める。
- ・「指導力向上特別講座」への参加者を増やすために、教職課程の教員の協力を得るよう働きかける。
- ・魅力ある「指導力向上特別講座」とするために、学生のニーズや教育の動向を掴むとともに、教育委員会の意向を重視し、名東区内の学校との調整を十分に図る。

【計画(方法)】

- ① 3年生前期中に「私の目指す教師像・カルテ(仮称)」に記入させ、個別・集団での指導を行う。
- ② 前年度の状況や傾向を分析したものを資料化し、過去問への挑戦とともに、その参考資料を基に、繰り返しの学習を進める。
- ③ 「指導力向上特別講座」の拡充に向け、学生に周知が必要な事項については、その都度関係教員を通して「教職支援センターニュース」等を配布する。
- ④ 技能の向上が求められる事項の演習を充実させ、名古屋市の先進的な教育実践校や名東区内の学校行事参観を行う。

○担当科目

(前期)

(後期)

○教育方法の実践

①については、4年生の教採直前の願書のPR欄に「こんな教師を目指している」と記入していたが、早い段階で目標を明確にさせ努力させることが意欲の継続のために必要であると考え、3年生

前期に「私の目指す教師像」を明らかにさせた。その際、全国の自治体の教育委員会が出している「求める教師像」を参考資料にさせるとともに、教師像を実現するための「手立て」についても考えさせ、個別指導を行う中で決定をさせた。そして、常に意識させることが必要と考え、教職支援センター主催の講座・イベントのアンケート用紙に教師像と講座への参加の目標を明記させた。また、自らの努力や成長の過程が分かるようカルテを作成した。学年末に行った学生の「私の目指す教師像」の振り返りでは、意識して講座やイベントに参加した学生がほとんどで、振り返りの内容を見ると自分の成長を感じたり、新たな課題を見つけたりする記述がみられ、意義ある取り組みであったと考える。

②については、出版社が出している過去5年間の出題状況・内容等の分析を行い、ご当地問題と合わせた資料を作成した。特に、出題傾向が高い教職教養に関する穴埋め問題については、繰り返しの学習が必須と考え、「毎日の学習」シリーズNO.1～NO.5を作成し、自らのペースに合わせて挑戦させた。模擬試験では実力が発揮できない学生もいたが、前向きに取り組もうとする学生が多くなってきている。より多くの成功体験をさせていきたい。

③については、「指導力向上特別講座」として実施した「名東区内の学校行事参観」では、学校開放日参観では小中併せて8校、出前授業参観では6校の協力を得て実施し、のべ60名の学生が参加した。学生への周知として毎回「教職支援センターニュース」を発行し、TOPOSに掲載するとともに、Teamsでの呼びかけを行った。また、教職支援センター運営委員会では、講座やイベント等の提案をし、参加者の共有を図ってきた。

④については、特に、ICT機器に関する知識・技能の向上を図ることを目的に、専門家による演習や先進校の視察を行った。今年度は、「ロイロノート・キュービナ・電子黒板・デジタル教科書」の有効活用講座を実施した。とりわけ、デジタル教科書については、初めての体験であり、興味・関心をもって受講していた。先進校視察では、昨年度の山吹小学校に続き、名古屋市で一番初めに委託を受けた矢田小学校の視察を行うとともに、名東区学校行事参観においてもICT機器を使用する授業を優先的に参観させた。

○作成した教科書・教材

○自己評価

- ①については、十分達成できた。
- ②については、十分達成できた。
- ③については、おおむね達成できた。
- ④については、十分達成できた。

【③の課題】

「指導力向上特別講座」は、教員としての資質・能力を高めるために実施するという趣旨から1年生から4年生全ての学生の希望者を募っているものの、参加者が固定化してきている。より多くの学生が参加できるよう、教職課程の先生方の協力も得て増員していきたい。

II 研究活動

○研究課題

学生に自信をもって採用試験に挑戦させるとともに、教員としての力量を高める効果的な特別講座の在り方を探求する。

○目標・計画

【目標】

- ・自信をもって試験に臨ませるために、知識・技能を高めることはもとより、効果的な学習方法を身に付けさせる。
- ・学び方を学ぶ充実した特別講座を実施するために、TAC による特別講座との連携を図るとともに、計画的な模擬試験の受験や過去問を中心とした繰り返しの学習を展開する。
- ・ICT 機器に関する技能の向上を図るために、演習の充実を図る

【計画】

- ① 学生の受験希望自治体の試験傾向を分析し、関連のある問題を繰り返し解くことからポイントを絞った学びを進めていく。
- ② 計画にそった繰り返しの学習を展開し、学習成果を確かめるとともに、模擬試験に挑戦させる。
- ③ 名古屋市や名東区の学校との連携を密にし、先進的な授業や学校行事を参観し、学校現場の理解や創意工夫した取り組みについて学ぶ。
- ④ 学校が使用しているソフト(ロイロノートやキュービナ等)を中心に、演習の時間を確保する。

○2016年4月から2024年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

（学術論文）

（学会発表）

（特許）

（その他）

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

○所属学会

○自己評価

- ①については、十分達成できた。
- ②については、十分達成できた。
- ③については、十分達成できた。
- ④については、十分達成できた。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

- ・教職支援センター運営委員会委員長として、事業全体を掌握するとともに、センター長として、センター業務をさらに充実させる。

【計画】

- ① 教職支援センターとしての授業展開に責任をもって臨むため、共同行動を求めるとともに、幼小保・中高教職課程部会との綿密な連携を図る。
- ② 教職支援センター主催での教採合格に向けた特別講座と指導力向上に向けた特別講座を充実させる。

- ③ 文科省による教職課程「実地調査」の可能性が高いので、その準備を進める。
- ④ 複数免許取得等の課題解決に向け、当該学生への支援をする。

○学内委員等

○自己評価

- ①については、十分達成できた。
- ②については、おおむね達成できた。
- ③については、十分達成できた。
- ④については、おおむね達成できた。

【②の課題】

採用試験合格に向けての筆記試験では、一般教養・教職教養・教科専門に対応することとなるが、TACが行う東邦STEPとの日程調整がうまくいかず、学生の重なりもあり設定までかなりの時間を要した。また、TACと担当教員、担当教員同士の進捗状況報告を意識して進捗を進めていく必要がある。

【④の課題】

複数免許取得のために本年度から星槎大学との協定を結んだ。その結果7名の学生が在学中に複数免許取得に取り組んだ。ほとんどが中高教職課程の学生であり、小学校免許取得を目指したものの途中でリタイヤする学生がいた。こういった学生の支援に力を入れていかなければならない。

IV 社会貢献

○目標・計画

【目標】

- ・サービス・ラーニング(授業科目)を通じて、学校・園などへの訪問を進める中で、名東区内の幼稚園・保育所・小中学校・児童福祉施設との連携をさらに深めていく支援を行う。
- ・科目外の学校支援ボランティア活動の紹介に努め、学生に学校等の実情を掴ませる機会を提供する。

【計画】

- ① サービス・ラーニングの成果を報告しながら、学校・園など諸機関の行事の支援を進める。
- ② 教職支援センターニュースの発行や教職支援センター掲示板への掲示を通して、学校支援ボランティアの紹介をする。
- ③ 名古屋市教育委員会や名東区校長会との連絡を密にし、互いに協力する体制を続ける。

○学会活動等

○地域連携・社会貢献等

○自己評価

- ①については、十分達成できた。
- ②については、十分達成できた。
- ③については、十分達成できた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学会交流、自己研鑽等）

VI 総括

2023年度は、本学の理念とともに、各自治体が示している「教員育成指標」も加味した形で教職支援センターとしての「教員養成に対する理念」を次のように明確にした。

「教員としての情熱や使命感をもって子どもと関わることができる学生の育成」

この理念については、教職支援センター運営委員会に置いて決定し、全教員で共有することとした。

2023年度は、コロナが5類に移行されたことにより通常の対面での授業や対応を行うことができるようになり、教職支援センターとして実施する講座やイベントをすべて実施することができたことは幸いである。

今年度の大きな成果は、「私の目指す教師像」を明確にした取り組みである。目標や目的をもって様々な活動に参加することは、自分の成長の過程や努力の成果を実感させるうえで大変効果的である。当然、教師としてのアドバイスは重要であるが、学生同士が指導者像を知ることにより切磋琢磨していく姿勢も見ることができ、個としての力とともに集団の力を高めることにもつながると考える。

採用試験の総括としては、繰り返しの学習やきめ細かな面接・論文等の指導により、特講生 15名中 12名が正規職員や教職員大学等への進路決定ができた。来年度から採用試験の早期化が本格化することによる変化が明らかになってくるが、その動向を注視するとともに、受験自治体の決定等での対応策を検討していくことが必要である。

「指導力向上特別講座」は、学生に体験を通して現場実態を知らせる上で大変効果があったと考える。2025年度に教育学部の再編もあり、サービス・ラーニングを中心に体験を重視した系統的なカリキュラムが検討される中で、正課の授業として位置付けていく講座も存在すると考えられる。現場での教育の実情を十分加味したうえでの学生の学ぶ教育環境づくりに努めていく必要がある。

以上